

John Locke

(1632-1704)

1 講義のポイント

(1) ロックの私的所有権が絶対王政との対立の中から生まれてきたことを観察する。

→「自由」を論じるときに「何からの自由か？」ということを常に念頭に置く。

(2) 私的所有権が確立されるということ、キリスト教社会で経済活動が是認されるということの意味を理解する。

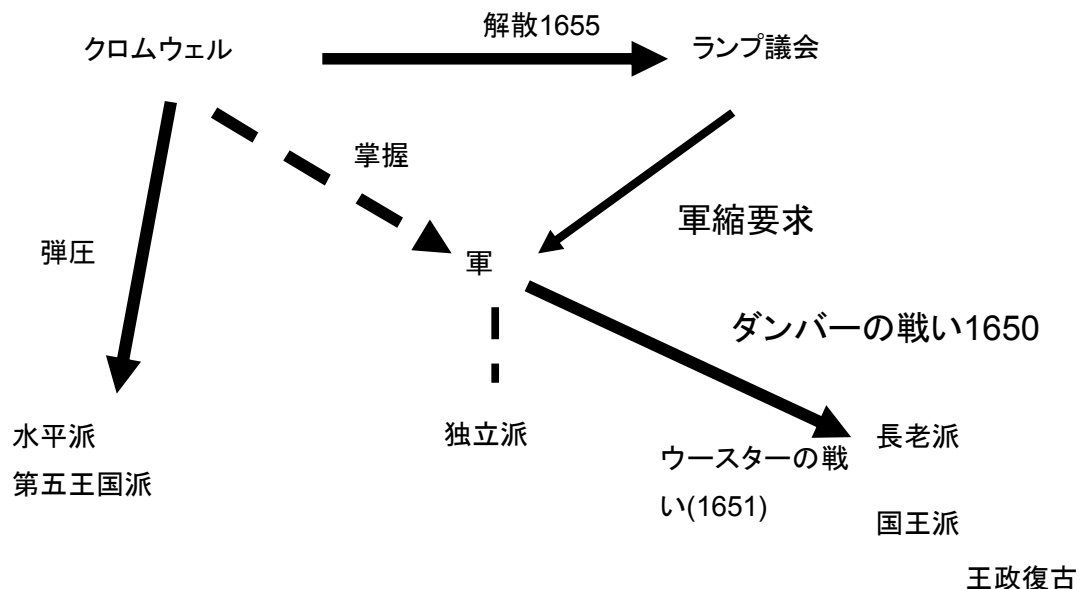
→宗教と経済というテーマは現在の日本人にはなかなか想像がつかないが、経済を支配する経済以外の社会要素を考えることは重要である。

(3) 私的所有権が、資本主義（市場社会）のすべての出発点であるということを理解する。

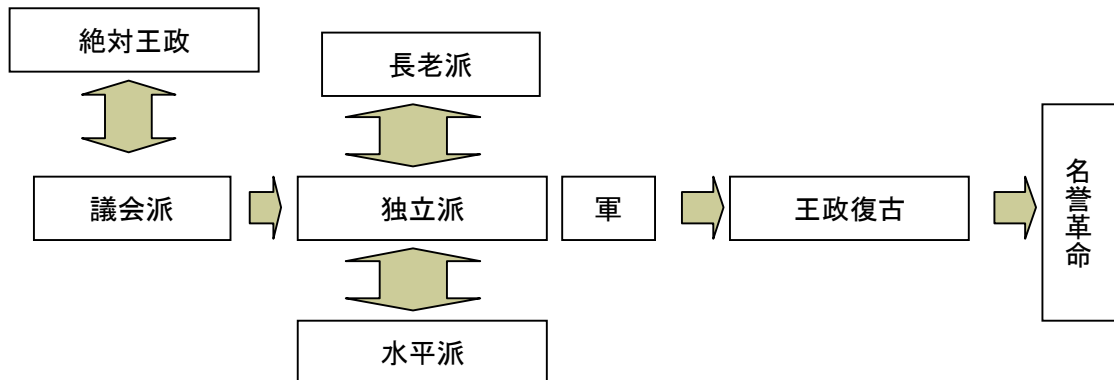
2 時代背景

(1) イギリス市民戦争の時代

- 王権に対して、一部貴族、経済力を付けた都市住民（商工業者）、地主（ジェントリ）、貧困層が抵抗し、自分たちの権利獲得を目指した。
- しかし、王権に抵抗したグループの中にもいくつものグループがあり、ここで勝利したのが都市住民であり、それに荷担したのが清教徒であった。



チャールズI 世



(2)新しい階級の台頭 —ジェントリー

- 現在の「ジェントルマン」の語源であるが、イギリスでは貴族階級の下に位置する階級でバロネット、ナイト、エスカイヤー、ジェントルマンと分けられる。
- 中世においては下層の地方封建領主であり、貴族に従属する階級であった。
- 16世紀ごろから、封建領主ではなく地主としての性格を強くする。
- 清教徒の主導権奪取は実は中小ジェントリによる大ジェントリへの反乱であり、名誉革命は大ジェントリによる反撃であると言われている。

ロックは基本的に清教徒革命には批判的であり、その意味でロックの議論は名誉革命で主導権を握った大ジェントリのための議論であるということを理解しよう

大ジェントリ＝封建制の中で生まれ封建制の破壊者

17世紀は大ジェントリが成長した時期である。

- ・ 従来の農業に加えて、羊毛業を経営する。
- ・ さらに奢侈品の製造も行う。
- ・ 産業革命の担い手になっていく

台頭したジェントリ階級が正当化しなければならなかったもの

- 自分たちの生命・財産の処分権は王ではなく、自分たちにあること。
- 自らの基盤である経済活動＝自分が稼いだものを、自分のものとする制度

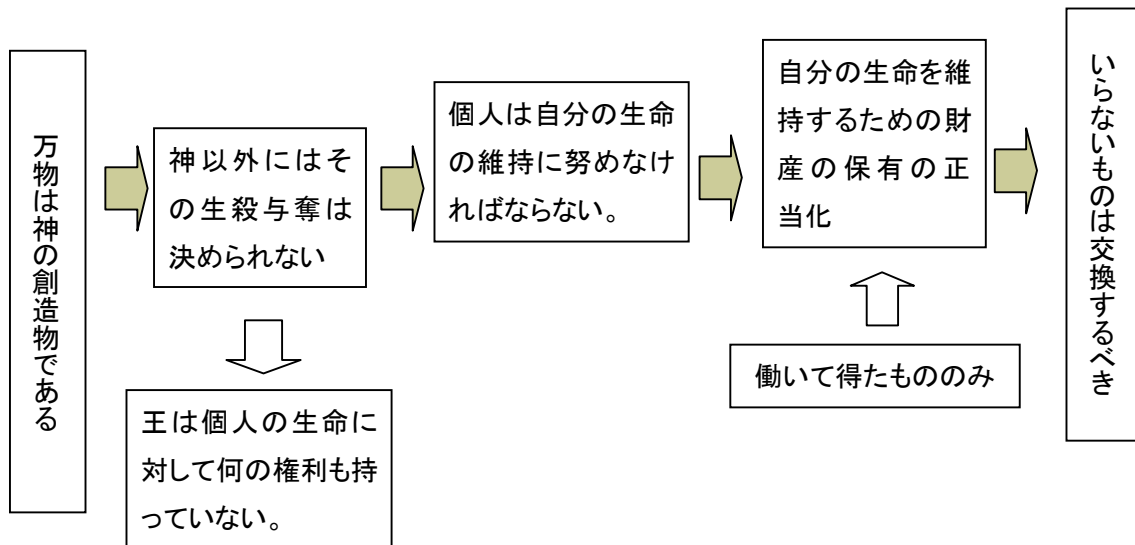
王が個人の権利を侵害する権利←**王権神授**（王の権利は神によって裏付けられているという考え方）

キリスト教が絶対的な地位を占める時代、王権神授説を放置したままでは、自分たちの正当性が維持できなかった。特に国王とは別に法王がいるカトリックとは異なり、イギ

リス国教会では、国王の権限が非常に強い。

キリスト教の教えに反しない方法で、王権神授説を反駁し、個人の権利を擁護する必要があった。

3 ロックの論理展開



(4)自然権の概念

- 自己の「生命・自由・財産」すなわち「所有権」を自由に用いて、自己および人類の保存と繁栄を追求する権利と義務を持つ。
- 所有権の侵害が起きたときはこれを処罰する権利を持つ（執行権）。

所有権と執行権は、生まれながらにして神から与えられているという意味で、自然権と呼ばれる。

(5)国家と国民の関係

- 国家は、国民（有権者）の信託のもとで、自己保存権と執行権の一部を譲渡される。
- しかし、政府には常に腐敗と自由と財産の侵害の危険性がつきまとう。そのような時に、自己の所有権を守るために合法的に抵抗する権利（抵抗権）と政府を妥当して、作り直す権利（革命権）を持つ。

経済活動が宗教的に正当化されることの歴史的意義

封建社会（宗教）では、低く見られることの多い経済活動（ex.土農工商）

→産業社会の成立のためには、まず経済活動の肯定、公認が必要であった。

過去においても実質的には経済力なしでは何もしえなかったにも関わらず、軍事あるいは宗教の方が上位に来る傾向があった。

→宗教が経済活動を抑制し、暴力が基本を破壊する。

ex.利子の禁止、商人差別、高率できまぐれな税金、無制限の貨幣発行

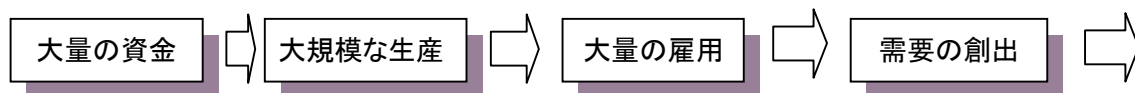
4 三大経済システムの誕生

この時代、非常に重要な経済システムが誕生する

- **銀行**：高利貸しではなく、信用創造を元とした金融機関。
- **株式会社**：1602年に設立されたオランダ東インド会社が、世界最初の株式会社。
- **保険会社**：古くはフェニキア人まで遡り13世紀イタリアには、同業者組合としての保険が存在したが、近代保険の祖は1773年(コーヒーハウス自体は1688年頃)に誕生したロイズであると言われている。

大金融時代が工場生産の基礎となる

個人的な貸し借りで、資金を調達していた時代から、システムとして大量に資金を投入できる時代に。



金融がすべての経済活動の出発点であることは、それまで理解されていなかった

→それまでとは規模の違う産業

5 まとめ ―ロックの思想の位置づけ―

- ロックの議論は古い時代の終わりと新しい時代への出発点である**時代を象徴**している。
- ロックの議論は単に目の前の事実の観察だけから生まれたわけではなく、むしろ自分の属していた階級の正当化として生まれた。
- だが、それはまさに新時代の担い手となる階級であり、宗教と暴力の時代から、経済活動が支配する時代へと移行していく。

予習と復習のポイント

1. 「生命・財産・自由」といういわゆるロックの三権を，教科書 15-18 頁の議論を参考にしてまとめてみよう。
2. 17 世紀から 18 世紀初頭は，それまでの「支配する国家」から，市民革命を経て，「市民のための国家」に徐々に変化し始めた時代であった。これが後の 19 世紀そして 20 世紀の国家へと変貌する。そのことを念頭に入れて，国家と市民の関係を教科書 18-20 頁の議論を参考にして整理してみよう。

考えてみよう

- (1) イギリスでは権利は長い歴史の権力闘争の中で人々が血を流しながら少しずつ勝ち取ってきたものである。一方，日本では，権利は明治維新以降の近代化と第二次大戦後のアメリカ化の流れの中で「輸入」されたものである。この違いを踏まえて，イギリスと日本における民主主義という言葉の持つ意味の違いを考えてみよう。
- (2) ロックの生きた時代は，近代的な金融システムが誕生した時期でもあった。航海上の発見，金融制度，市民革命という三つの要素がどのように絡み合い，約 100 年後に起きる産業革命にどのようにつながっていったかを念頭に置こう。
- (3) 私的所有権は，市場社会の基礎的制度である。しかし，私的所有権があるが故に，市場社会の様々な問題が現れているとも言える。マルクスやケインズ，そしてハイエクの講義へと続くこの私的所有権と市場社会の功罪を理解するために，なぜ近代の出発点において私的所有権の確立が必要であったのか，もう一度整理しておこう。